



# こんにちは、 岐教事です！

岐阜教育事務所だより  
11月号 (No. 8)  
平成 28 年 12 月 5 日発行

学校の活性化につながる確かな取組

「組織を生かして」

学校職員課 学校人事係

今年度、管内 67 校を学校経営・人事管理訪問で参観させていただきました。その中で、学校として組織を生かした取組が効果的に実践されている様子を紹介します。



## ◆学校の実態から取組の重点化・具体化

児童生徒や地域、職員の実態を捉える中で、よさや強みを明らかにして、それを生かす取組をしている学校があります。できていないことに目を向けて向上を図ることも必要ですが、その克服には多くの努力が必要になります。よさや強みを生かすことで、その先生の自信や充実感にもつながっていました。

また、学校の課題については、その要因を明らかにして、要因に応じた手立てを、学校として一つか二つに絞って取り組むことで、「どの先生も、どの学級も、今このことを大切にして取り組んでいる」ことが、児童生徒の姿となって表れていました。

## ◆学年会や教科部会の充実

学校には、経験年数やこれまでのキャリアもさまざまな先生方がみえます。学年会や教科部会で、互いの実践や今後の計画等を話し合う中で、効果的な手立てや工夫が共有され、経験年数の短い先生方を育成することにもつながっていました。また、学年主任の先生が、今年度自己啓発面談から重点として取り組んでいることとして「自分の学年を～したい」と書かれている学校がいくつもありました。自分の学級や自分の授業のことだけではなく、自分の立場や分掌から学年や学校をどうしたいのか、願いとその方途をもって実践をされています。学年主任会を今年度から位置付けて、学年を越えて助け合えるチームとして取り組んでいる学校もありました。

小規模の学校では、学年会が複数年（学年部）で構成されていたり、中学校区の他校と連携して教科指導について研修したりと、学校規模に応じた工夫もありました。「できない」ではなく「どうしたらできるか、よくなるか」を考えてのことです。

## ◆会議のもち方を工夫して、主体性を発揮

職員会議では限られた職員からの提案のみにして、職員会議後に学年会を位置付けて、学年の担当者から具体的に提案するという実践をしている大規模校もありました。学年の先生に責任をもって伝えなければならないので、自ら考えて提案を作成することになります。それが、担当の先生の指導構想力を伸ばすことにもつながっています。

1 月 1 日から新しく人事評価制度も始まりました。自分の校務分掌を踏まえて目標を立て、その達成度を自己評価します。これまで以上に、先生方一人一人が自分自身の実践を通して学校経営に参画していく意識が求められます。

組織を生かすきっかけづくりは、管理職の方々かもしれませんが、実際に動きをつくっていくのは、先生方一人一人です。「誰かが」ではなく、「自分が」・「自分から」を大切にして、学校の教育目標や校長先生の経営ビジョンの具現にむけて力を合わせて取り組みましょう。



## きれい！と光る すてきな実践を紹介します！

### 自分の 考えの形成

#### 国語科編



小学校高学年において、読むことの指導事項オ「考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること」に焦点を当てた授業を参観しました。

説明文の筆者の主張に対する自分の考えの交流が、グループで行われました。その際「これまでの学習で読み取ったこと」を根拠として交流が行われていました。そのことによって、単なる発表会となるのではなく、一人一人の考えの根拠が明確になるとともに、仲間の意見から自分の考えの深まりや広まりを実感することにつながっていました。

定着状況を見届ける際には、児童の考えの変容が自己評価、相互評価及び教師による評価で示され、「考えに適した根拠を選ぶことの大切さ」を児童が実感する姿を具現していただきました。

### 見通し 仲間と高め合う

#### 保健体育編



器械運動「跳び箱」で、頭はね跳びの足を蹴り上げるタイミングをつかむ時間を参観しました。

課題づくりでは、師範で技に憧れを抱かせるとともに、VTRを活用し、「跳ねるタイミング」に視点を絞って3回の観察を行いました。1回目には、「技の全体のイメージ」を、2回目には、スロー再生で「跳ねるタイミングのイメージ」を、3回目には、通常再生で「跳ねるタイミングのイメージ」を確認しました。こうした「跳ねるタイミング」に視点を絞った課題づくりによって、一人一人の目指す姿が明確となりました。これにより、仲間との活発な教え合いが生まれるとともに、一人一人が技能の高まりを実感する姿を具現していただきました。

### 確かな 実態把握

#### 特別支援教育編



エプロンや箸入れ等をミシンで製作する中学校特別支援学級（知的）の作業学習の授業を参観しました。

全員が、ミシンで製品を黙々と縫っています。よく見ると、真っ直ぐに縫えるための補助具があったり、運針のスピード設定が異なったりと、「生徒が一人のできる環境づくり」がしっかりと構成されていました。

作業終了ぎりぎりに「できた！」と、ある生徒が、満面の笑みで先生に報告をしました。作業目標の設定が、この生徒にとって「手を抜くとできないけれど、ちょっと頑張ればできる」適度抵抗のあるものだったのです。生徒の力を引き出すことのできた先生の実態把握は見事でした。

作業学習や生活単元学習のねらいの設定は、児童生徒の確かな実態把握から…。このことを再確認させていただいた実践でした。

